
体育史学会 会報

Japan Society of the History of Physical Education and Sport

臨時 No. 228 2023. 4. 24

体育史学会事務局
<http://www.taiikushi.org>

〒301-0844
茨城県龍ケ崎市平畑 120
流通経済大学
小谷究研究室内
Tel : 0297-64-0001
e-mail : taiikushi_office@taiikushi.org

事務局への連絡は、なるべく
e-mail をご利用下さい。

<目次>

- I. 故 阿部生雄先生への追悼文
- II. 故 成田十次郎先生への追悼文

昨年、本学会会員の阿部生雄先生と成田十次郎先生がご逝去されました。阿部先生と成田先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

ご承知のとおり、成田十次郎先生と阿部生雄先生は、体育・スポーツ史研究に優れたご功績を残されただけでなく、成田先生は体育史学会が体育史専門領域として所属する日本体育・スポーツ・健康学会（旧日本体育学会）の会長を、阿部先生は体育史学会の前身組織、日本体育学会体育史専門分科会会長をお務めになりました。

このように、本学会の運営においても大変なご尽力をいただいたお二人を記録に残すことは、体育・スポーツ史研究それ自体の歴史にとっても重要な情報になると考えています。

そこで、この度、体育史学会では、阿部生雄先生と成田十次郎先生を偲んで、お二人の先生の追悼会報を会報の臨時号として発行することにしました。

今年度中は、引き続き追悼文をお寄せいただくことができます。年度末に刊行される研究誌『体育史研究』に残すことも検討していますので、よろしく願いいたします。

I. 故 阿部生雄先生への追悼文

追悼 阿部生雄先生

体育史学会理事 秋元 忍

阿部生雄先生は、体育・スポーツ史の領域に数々の功績を残された、偉大な研究者、教育者でした。2021年12月18日、先生は76歳で逝去されました。先生の早すぎる逝去は、先生を知る多くの人々に、深い悲しみと喪失感をもたらしました。

先生の一周年となる2022年12月18日に刊行された、阿部生雄先生追悼記念集録刊行会『阿部生雄先生追悼記念集録』には、先生の経歴、研究業績がまとめられています。先生の功績に敬意を表し、本書に拠りその一部を紹介させていただきます。

先生は、1964年に入学された東京教育大学体育学部体育学科において、体育史研究室に入室されました。1972年、同大学大学院教育学研究科を修了され、1973年から1974年にはマンチェスター大学に留学されました。1975年より宇都宮大学、1982年より東京学芸大学にて研

究、教育を続けられ、1984年、筑波大学体育科学系に助教授として着任されました。1994年から1995年の在外研究（ロンドン大学）を経て、1996年には筑波大学体育科学系教授に昇任され、2009年まで同職を務められました。2009年から2011年まで筑波大学理事の業務に従事され、2011年4月、筑波大学名誉教授の称号を授与されました。

先生は、主としてイギリス体育・スポーツ史研究に従事されました。その成果は、英文著書・論文15編、著書38編、論文39編、その他の論文37編、口頭発表・シンポジウム報告・招待講演等42編に及んでいます。先生の幅広い視野と深い洞察力に基づく、これらの緻密な研究は、今も国内外の研究者に大きな影響を与えています。また先生は、2004年から2007年まで、体育史学会の前身である日本体育学会体育史専門分科会の会長として、学会活動を主導され、この研究領域の発展に貢献されました。

先生は、研究者としてだけでなく、教育者としても優れた能力をお持ちでした。筑波大学では、卒業論文、修士論文、博士論文指導を通して、多くの後進を育成されました。さらに先生は、2003年から2008年まで、筑波大学附属中学校の校長として、生徒たちに知識や教養を伝えるとともに、体育・スポーツの価値についても語られていました。先生の著書、『みなさん、今日は一向上心への呼びかけ』（図書文化社、2008年）には、同校校長時代の講話が再録されています。

先生が残した多くの論考や教えは、今後の研究や教育において、引き続き重要な役割を果たすことでしょう。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

阿部先生の研究力と人となり

有賀郁敏（立命館大学）

阿部生雄先生の学問的力量に関しては英国スポーツ史研究者はじめとする高い評価があり、私が付け加えるものはない。もっとも、阿部先生の人となりの受け止めは人それぞれであるから、この点を念頭に先生に対する私の思いを少しだけ述べたい。

1995年1月、ベルリン近郊のヴァン湖（Wannsee：「最終解決」で知られる「ヴァンゼー会議」の場）の畔にある建物で、第1回日独スポーツ科学者会議が開かれた。日本からは成田先生、山本先生、楠戸先生といったドイツ体育・スポーツ史研究者らが参加し、ドイツからはオモーフ・グルーペ、ハンス・ヨアヒム・タイヒラー、マンフレッド・レンマーなど錚々たる研究者が顔を揃えた。当時若かった私も、少し年上の中村哲夫先生と末席で参加した。報告の多くは、残念なことに忘却の彼方へ消えてしまったが、次の2つのことは鮮明に記憶している。

1つは哲学、社会学、歴史学等を組み合わせたグルーペ教授のスポーツ人間学（Sportanthropologie）の射程の広さと深さに圧倒されたことである。もう1つは、そうしたドイツ人識者による、ずしりと重い学問的言説を阿部先生（ロンドン大学の客員研究員として英国滞在中）が実に巧みに訳された上で、私たちにも分かりやすく説明して下さったことである。国際学会ではテクニカルタームをはじめ、当該の学問的土壌を把握していなければよりよい通訳とはならない。阿部先生の英語力の秀逸さとスポーツ科学全般に関する造詣の深さはドイツ人研究者からも高く評価されていたように思う。

このようなアカデミシャンたる阿部先生には懇親会で見せるフレンドリーというか、ある種無邪気さのような側面がある。ドイツに来たのにビールを飲まれないのはもったいないと思いきや、先生は懇親の場にすんなり溶け込まれ、先生の社交力はすごいなと驚いた。このような先生の人となりを成す学研肌と無邪気さの混濁は学会大会の懇親会はじめ色々な場面で垣間見られ、院生のみならず周りの人たちを惹きつけてやまない先生の人間的魅力となっているのだろう。

あまりにも早い先生のご逝去は残念でならない。先生が残された学問と社交の財産を継承・発展させてゆくことが先生の学恩に報いることだと思っている。あらためて、阿部先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

標記のストレンジ・シンポジウムについては、平成20年9月11日に日本体育学会第59回大会（早稲田大学）の体育史専門分科会（当時）シンポジウムとして、阿部生雄先生がコーディネイトされた。当時、榊原は分科会の事務局長を仰せつかっており、シンポジウムの実施にあたって、ストレンジ研究に取り組まれる先生の熱意と姿勢を強く感じていた。また、ストレンジ研究をめぐっての国際的学術協力とも言うべき周到な準備とこれまでの研究成果を収斂するとりまとめまでを阿部先生が担っておられた。詳細は、『体育史研究』第26号に掲載されているシンポジウム報告に記載されているが、シンポジウムの成果記述までの阿部先生のストレンジ研究の足跡をここに紹介し、先生への追悼文としたい。

わが国のボートと陸上競技の導入及び発展に決定的な役割を果たした東京大学予備門のお雇い外国人教師フレデリック・ウィリアム・ストレンジのイギリスでの生い立ちが次第に明らかにされつつあったことから、ストレンジ研究家の高橋孝蔵氏、アメリカのリチャード・ルイス博士、イギリスのレイ・フェザー女史によってなされている研究調査の最新情報について、高橋氏とルイス博士を招いて詳細に報告してもらった。高橋報告の圧巻は、ストレンジはイギリスのユニヴァーシティ・カレッジ・スクール（UCS）で江戸幕府が派遣した日本人留学生（その内の人に後の東大総長、菊池大麓が含まれていた）と接点があったことを解明したことであった。UCSの入学試験の名簿に日本人留学生とストレンジの名前があったのである。1973年、渡辺融先生は「ストレンジ考」の論考において、ストレンジの来日時期の特定、東京英語学校への採用の時期と待遇、東京築地外国人居留地の東京アマチュア・アスレチック協会での活動などを紹介され、既にストレンジ研究への緒をつけられていた。

阿部先生は、ストレンジの出生地、父親と母親の出自と職業家族関係、ストレンジの学歴、当時のUCSでのアスレティシズムの状況を、イギリスでの実地調査をもとにして仮説を提示されていた。阿部先生は、そうしたストレンジ研究の蓄積を経て、新たなストレンジ像の再構成として、日本の研究者、イギリスの研究者、そしてアメリカの研究者の国際的学術協力によって初めて確認できたことをシンポジウムの成果としてあげておられたのである。ストレンジ・シンポジウムは「スポーツにおけるクロス・カルチュラルな人物史研究が、国際的な協力体制によって推進されるべき重要な研究分野であるということを示してくれたように思う」と阿部先生は語っておられた。先生の体育史学会へのご貢献に対し敬意を表し、御礼申し上げます。「ありがとうございました。」そして、謹んでご冥福をお祈りしたい。

Ⅱ. 故 成田十次郎先生への追悼文

成田十次郎先生の追悼文

体育史学会会長 新井博

成田十次郎先生が永眠なされました。我々体育・スポーツ史研究者にとって大変悲しいことであり、謹んで心よりお悔やみ申し上げます。

先生は、体育・スポーツ史の高名な研究者であります。一方でサッカーの優れた選手・監督であったばかりでなく、クラマー氏の招聘など日本サッカー界にとって数々の功績を残してこられたことで知られています。

ここでは、体育・スポーツ史研究者また教育者としての先生について、私が院生時代に知ったことや先生御自身の著『私とドイツスポーツ史の研究』（1996年）と『サッカーと郷愁と』（平成22年）から一部を紹介させていただき、御功績を称えたいと思います。

まず、先生は体育・スポーツ史の分野における国際的な仕事を成就されました。1967年にユネスコの協議団体「国際体育・スポーツ学会連合」の専門部会として「国際体育・スポーツ史委員会」が設立され、先生は副委員長になられました。そこで、世界の体育・スポーツの促進や国内外の研究組織の結成や研究会の開催を支援する活動を積極的に続けられました。1978

年に八王子で「国際体育・スポーツ史東京セミナー」を開催し、この分野における国際会議の先例を作りました。また1994年に高地で「東北アジア体育・スポーツ史セミナー」を開催して、まさに研究における東西の架け橋を結ぶ役割を果たされました。

また、研究教育において多くの体育・スポーツ史の研究者を世に送り出してこられました。先生が若い頃、仲間を集めて開催した研究会から、当該分野の基盤を構築された先生方が生まれ、その先生方から育った大勢の研究者が活躍され、今日では次世代の優秀な研究者が意気揚々と研究に取り組まれています。また韓国や台湾などでも礎となる先生方を御指導され、今日彼らのお弟子さん等が活躍されています。言うまでもなく、それ以外多くの研究者が成長して、活躍されております。

さらに、御自身の研究において、近代ドイツ体育・スポーツ史研究を第1巻から4巻までまとめられ、日本とドイツの体育・スポーツの在り方の違いを徹底して追及されてきました。

以上は、僅かなもので、他の功績は幾ばくか計り知れません。今日、私たちの立ち位置を問い直す上でも、先生の偉大な功績の一部でも後世に伝えることに否を唱える者はいないでしょう。深く、ご冥福をお祈りいたします。

「成田史学」とドイツ社会史

有賀郁敏（立命館大学）

成田十次郎先生はライフワーク『近代ドイツスポーツ史』第V巻の完成を前にお亡くなりになった。同巻ではワイマール、ナチズムそして分断国家ドイツにおける体育・スポーツが探究される予定だった（『体育史研究』第36号、2019年）。20世紀最大の世界史的課題の一つであるナチズムと体育・スポーツをめぐる歴史像を、先生はどのように描こうとされていたのだろうか。先生の浩瀚な著作から学び、己の知見と交錯させて議論することを心待ちにしていた私にとって、先生の早すぎるご逝去が残念でならない。

第69回日本体育学会大会（2018年、徳島大学）専門領域体育史の「キーノート」において、成田先生は時代区分の再検討をわれわれ体育・スポーツ史研究者に要請された。「成田史学」の白眉の一つは歴史主義とは異なる射程からの歴史実証の精度の高さにあり、時代の価値観あるいは理念の前景化に対するある種の謙抑さを私は感じてきた。その先生が時代区分を、しかもワイマールからナチズムの激動と戦後ドイツを視野に入れて問うとされたのである。時代区分（論）の底流に歴史認識に基づく歴史像が存在するとすれば、成田先生は1933年、1945年、1989（1990）年を時代区分としてきたドイツ史の通説になにほどの修正を施し、新しい体育・スポーツ史像を提示されようとしたのだろうか。学問的興味は尽きない。

ところで、ランケ流の歴史主義に対する批判から1960年代後半に台頭してきたドイツの社会（構造）史は、ドイツの「特殊な道」論争、ポストモダンの思潮による西洋啓蒙批判、日常史による構造・過程批判、言語論的転回による「物語」の復権等からの異議申し立てに遭遇した。しかし、「諸個人の自由で民主的で連帯的な社会」という理念を選択する批判的歴史学としての社会（構造）史の役割は失われておらず、ナチズムにしてもこの歴史理論の位相において探究されている（J. コッカ『歴史と啓蒙』1989年）。

コッカの社会（構造）史は、われわれが社会とどのように向き合うのかを問うているのであり、体育・スポーツの歴史的様態を新たな時代区分を通じて再検討すべきではないかという成田先生の学問的要請もこの点とシンクロしているように、私には思える。

無類の甘党の成田先生は、ひと足先に鬼籍に入られたご友人H. ユーバーホルスト先生—コッカの社会（構造）史をスポーツ史の領域で紹介—とスイーツを食しながら和やかに議論されているのではなかろうか。あらためて、成田先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

大学院進学が決まった1979年2月、成田先生に院では何を研究すると問われて、講談社の『体育史』で森川先生が書かれている1930年代の「反ファシズム統一戦線とスポーツ運動」を研究してみたいと言った私に、先生はチェコのソコールをやってみないかと提案されました。ソコールについては『体育史』や『近代ドイツ・スポーツ史第1巻』で民族解放運動と理解していましたので、そこに魅力を感じ即座にやりますと答えました。その日のうちにチェコ語の入門書を購入して勉強を開始しましたが、その後初めて読んだチェコ語文献がクラートキー（1903-1974）の『体育史』（1962年）でした。クラートキーは、1967年に東西の壁を越えた幅広い研究者の協力の下での世界体育史の出版を目的に創設された国際体育・スポーツ史委員会の初代会長で、彼にこの組織の創設を提案したのが若き日の成田先生でした。1960年のことだそうです。

成田先生には失礼なことになってしまうかもしれませんが、先生の著作の中で特に印象に残っているのは『私たちと近代体育』の第2章、とりわけ第3節の「近代の体育政策」です。節のまとめでは、「1842年の体育勅令は、それをそのまま読むと、これまでの体育史家のいうように、体育「復活」の勅令として、そして、近代ドイツ体育の制度化と発展に重要な意義をもつものとして、高く評価すべきもののように思われる。しかし、ひとたび、その内容の意味や意図するところを、それをとりまく情勢と関連させて詳細に検討すると、思想をぬきにした単なる体力づくりと兵役準備等々、近代体育の特質にかかわる多くの考えるべき問題がそこにひそんでいるように思われる」と書かれています。印象に残っているというのは私たちが研究に際して肝に銘じておくべきことが書かれていると思ったからです。私の場合は、この第3節から歴史研究の方法、先行研究批判と史料批判の方法を学ばせていただきました。ただし、こうした読み方ができるようになったのは初めて読んだ学部生の時のことではなく、だいぶ後になってからのことでした。先行研究批判と史料批判は常に心掛けてきたつもりではありますが、言うは易く行うは難しで、「それをとりまく情勢と関連させて詳細に検討する」ことは未だに一度もなしえていません。今後も満足のいく研究ができるとは思えないのですが、少しでも生かしていきたいと思っております。ありがとうございました。

成田先生からの4時間マンツーマン指導

五賀友継（国際武道大学）

私は、2008年度に筑波大学工学システム学類を卒業し、6年間石油会社で働いた後、2015年度に筑波大学大学院（体育史研究室）へ入学した。エンジニアとして海外の現場で働いていた私が、突然仕事を辞めて分野の全く異なる体育史に入ったので、周囲の人はさぞかし変な人だと感じたと思う。そのような私を、成田先生は「体育史はまだまだ新しい学問であり、君のような外から来た変わり者が必要なのだ」と温かいお言葉をかけていただいたことは今でも忘れない。

なぜ、私が成田先生と接点があるのか、それは指導教員であった齋藤健司先生のお陰である。近代弓道史について博士論文を執筆していた時、ゼミ中に齋藤先生が突然（意図的？）成田先生に指導してもらった方が良いと言って、その場で成田先生に電話をかけ、私は会いに行くこととなった。事前に成田先生のご自宅に博士論文の要約と説明資料をお送りし、2019年4月1日14時にご自宅へ伺うことになった。

当日、目白駅で成田先生とお会いすると、自宅で飼ってらっしゃる犬が吠えて鳴きやまないので喫茶店に行こうということになり、駅前の寛永堂という和菓子店に入った。そこからの4時間マンツーマン指導は、博士課程に在籍していた間の中で最も有意義な時間であった。博士論文のみならず、高知のこと、教育大に入った時のこと、今村嘉雄先生との思い出、ドイツのこと、今後の体育史の発展などについてもお話しいただいた。ご子息の話になり、寂しそうにされていたのが印象に残っている。4時間絶えることなくお話しいただき、私も将来このよ

うになりたいと思ったものである。

その後、私は博士課程を無事修了したが、時は既にコロナ禍となり、お手紙でのご報告となった。前後して私は国際武道大学に就職が決まったが、国際武道大学の大学院設置に成田先生が関わられており、これも縁だと激励のお手紙を頂いた。

さて、成田先生は鹿屋体育大学に蔵書を寄贈され、成田文庫が設置されている。その中に、前述した私の博士論文の要約と説明資料が入っている。当時はまだまだ未熟な内容で、権威ある史資料と並んで入っていることに恥ずかしさを感じている。これも成田先生から「頑張って」と言われているものだ勝手に解釈し、今後の体育史の発展に寄与していく所存である。

ご冥福をお祈りいたします。

以上